OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新出土資料関係文献提要（十六）
Author(s)	椛島, 雅弘
Citation	中国研究集刊. 2018, 64, p. 144-152
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72902
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　珍号（第六十四号）平成三十年六月　一四四―一五二頁

新出土資料関係文献提要（十六）

椛島雅弘

本提要は、『中国研究集刊』果号（第六十三号）に掲載された「新出土資料関係文献提要（十五）」の続編である。今回は、清華簡の原釈文および研究書を取り上げる。以下、「原釈文」「研究書（中文書）」「研究書（和書）」の三つに分類して紹介する。

原釈文

『清華大学蔵戦国竹簡〔陸〕』（清華大学出土文献研究与保護中心編・李学勤主編、中西書局、二〇一六年四月、二四一頁、縦組繁体字）

清華大学蔵戦国竹簡（清華簡）の図版と釈文とを収載した書。本書はその第六分冊にあたる。上下二冊からなり、上冊にはカラーの原寸大図版・拡大図版が収められ、下冊には釈文・注釈・字形表・竹簡信息表が収められている。本書には、『鄭武夫人規孺子』・『管仲』・『鄭文公問太伯』（甲乙）・『子儀』・『子産』の五篇が収録されている。以下、各整理者の説明をもとに、文献を紹介する。

『鄭武夫人規孺子』の整理者は李均明氏。竹簡は計十八枚現存し、竹簡背面の劃痕から推測するに、第十五簡が欠落しており、恐らく本来は十九枚であったと推測される。竹簡の保存状態は良好で、筆跡もはっきりとしている。簡長は約四十五センチ、幅〇・六センチ、三道編綫。竹簡背面に劃痕が三本見られるが、編号（竹簡番号）は確認できない。配列順番は内容と劃痕から決定さ

れた。篇題はなく、『鄭武夫人規孺子』は整理者による仮称である。整理者によれば、本文献は春秋時代の早期に成立し、今見えるテキストは戦国時代の抄本である。

本篇は、春秋早期、鄭の武公が世を去ってから埋葬された頃の話で、武公の夫人武姜らが跡継ぎの荘公に対して戒めの言葉を送る様子や、それに対する荘公の態度が記されている。

一方『左伝』等の歴史書も、武公と武姜の君主継承に関する問題について述べるが、それらは本文献とは観点が異なるほか、叙述が簡略であり、本文献にしか見えない内容が存在する。よって本文献は、春秋初期の鄭国史を研究する際、特に武公が世を去った後の跡継ぎ問題をめぐって展開する権力闘争の詳細を明らかにする上で資料価値を有する。

『管仲』の整理者は劉国忠氏。竹簡は現存三十枚、簡長は四十四・五センチ、幅〇・六センチ、三道編綫。竹簡の保存状態は良好だが、第二十八簡の下部と第二十九簡の上部が欠損している。この両簡の間に欠簡が存在する可能性があり、第二十九簡と第三十簡の間にも欠簡があると推測される。篇題は見えず、また編号も見えない。本文献は、斉の桓公と管仲の問答形式により形成されていることから、「管仲」と命名された。

本文献は、『管子』の多くの篇と文章の形式が一致しており、思想も互いに通じている。一方で、その内容は現行の『管子』諸篇と一致する部分が全く見られないので、恐らく『管子』の佚篇だと推測される。

本文献は対話形式であり、管仲が自身の治国理念を展開する。その中には陰陽五行思想が含まれており、特に『尚書』洪範篇を引用する点で注目される。洪範篇の成立年代については、長い間意見が分かれ、『管子』各篇の成立も多くの論争がなされている。本文献により、これらに関係する研究がさらに進むことが期待される。

『鄭文公問太伯』（甲乙）の整理者は馬楠氏。本文献には、甲本と乙本があり、両本の内容は基本的に同じである。整理者は、両本が同一の書き手によって、二つの異なる底本をもとに書写されたものだと推測する。竹簡は現存二十五枚、甲本は十四枚で第三簡に欠損があり、乙本は十二枚で第三簡が欠落している（実質十一枚）。簡長は四十五センチ、幅〇・六センチ、三道編綫。篇題はなく、『鄭文公問太伯』は整理者が付けた仮称である。

本文献は、太伯が臨終の際、鄭の文公に訓戒した言葉が記されている。本文献の内容の多くは、『左伝』・『国

語』にも記載されるが、周が東西に分かれる時期に在位していた桓公・武公・荘公に関する記載は、他の文献では語られない内容が多く、関連する歴史を補う点において資料価値を持つといえる。

『子儀』の整理者は趙平安氏。竹簡は現存二十枚、簡長はおよそ四十一・五センチ～四十一・七センチ、幅約〇・六センチ、篇題はなく、編号もみられない。竹簡背面の編号は存在しない。篇題もない。現存する竹簡に欠損は存在しないが、第十五簡と第十六簡、第十九簡と第二十簡の間に話の飛躍が見られ、恐らく欠簡が存在する。

本文献には、秦の穆公が楚の重臣子儀を送り帰す様子が記される。特筆すべきは、送り帰す際の二人の会話が詳細に記されている点であり、殽の戦い前後の秦・晋・楚三国の関係や、春秋時代における外交辞令を明らかにする上で重要な資料である。

『子産』の整理者は李学勤氏。簡長は約四十五センチ、幅約〇・六センチ、現存二十九枚、内容は子産の道徳修養及び政策に関する論説を伝えるものである。全体は十個の小段に分けることができ、第九段落まではすべて「此謂……」という形式で締めくくられる。本文献は、「聖君」が、どのようにして人民に利して自己を向上させ、民衆の信用・支持を得るのか、という内容ではじまる。また、子産を重臣とみなす記述が見えたり、どのように「自勝立中」（自己に打ち克って公平な政治を実現）して、「助上牧民」（為政者による人民統治を補佐）するのか述べる。文献中では、子産が先賢先哲に近づけるよう努力したり、良臣を集めて「六輔」とする等の政策が述べられる。特筆すべきは、文献中で子産が夏・商・周の令・刑（「三邦之令」「三邦之刑」）を参照して、「鄭令」「野令」「鄭刑」「野刑」を制定したという点である。これは、『左伝』において、子産が刑罰に関する書を作成したという記載を裏付けるだけでなく、その情報を補うものである。

『清華大学蔵戦国竹簡〔柒〕』（清華大学出土文献研究与保護中心編・李学勤主編、中西書局、二〇一七年四月、二三八頁、縦組繁体字）

清華大学蔵戦国竹簡（清華簡）の図版と釈文とを収載した書。本書はその第七分冊にあたる。上下二冊からなり、上冊にはカラーの原寸大図版・拡大図版が収められ、下冊には釈文・注釈・字形表・竹簡信息表が収めら

れている。本書には、『子犯子餘』・『晉文公入於晉』・『越公其事』・『趙簡子』の四篇が収録されている。以下、各整理者の説明をもとに、文献を紹介する。

『子犯子餘』の整理者は陳穎飛氏。現存十五枚、簡長は約四十五センチ、幅約〇・五センチ、三道編綫。第一簡・第四簡・第五簡・第六簡の上部の編縄箇所より上が残欠しており、それぞれ三文字分に相当する。また、第十四簡の上部が一字分残欠しているが、それら以外の竹簡の保存状態は良好である。篇題の「子軛（犯）子余（餘）」は、第一簡の背面（上部の編縄箇所のすぐ下）に見え、また本文と同一の筆者によるものである。編号はないが、句読点を表す符号（墨点）が存在する。また、『晉文公入於晉』の形制・筆跡が同一であると同時に、どちらも晋の記事であるため、同時期に書写されたことが推測される。

本文献の性質は『国語』に類似しており、重耳が秦に亡命した際、子犯・子餘が穆公の詰問に対し返答する様子や、穆公と重耳がそれぞれ政治について蹇叔に問う様子が記述されている。

『晉文公入於晉』の整理者は馬楠氏。現存八枚、簡長は約四十五センチ、幅〇・五センチ。第一簡・第五簡を除き、欠損は見られない。篇題や編号はない。本文献は、晋の文公（重耳）が亡命生活を終え帰国した後、内政を整え、刑罰を監督し、祭祀を行い、農業を推進し、武備を増設し、城濮の戦いに勝利して天下に覇を唱え、河東の諸侯を盟下に加えるまでが述べられる。この内容は、『左伝』・『国語』等にも記載されるが、兵制に関する記述は詳細で、史書の欠けた部分を補うことができる。

『趙簡子』の整理者は趙平安氏。計十一枚、簡長は約四十一・六センチ、幅〇・六センチ、第四簡・第十一簡を除き、竹簡に欠損は見られない。編号は存在しない。本文献は二つに分けられ、前半部分は范献子の趙簡子に対する諫言で、後半部分は趙簡子と成鱄の問答である。范献子と趙簡子は、晋の著名な人物である。成鱄も晋の大夫であり、三者は『左伝』と『説苑』に記述が見られる。前半部分は、范献子と趙簡子の政治上での微妙な関係が反映されている。後半部分は、趙簡子と成鱄の問答を通じて、「倹」「侈」「礼」及び国家統治の間にどのような関係があるのか、弁別して論証する。本文献は、春秋晩期の歴史・思想を研究する上で一定の資料的価値を有する。

『越公其事』の整理者は李守奎氏。篇題の「越公其事」は、最終簡の本文に続けて書写されている。計七十五枚、計十一章で構成され、各章末尾には墨点が存在し、次章は簡を改めて書写されている。竹簡の欠損がいくつか見られ、第一章と第十一章の竹簡断裂は比較的深刻である。簡長は約四十一・六センチ、幅約〇・五センチ、背面には劃痕が見られる。満写簡は三十一～三十三字書かれ、すべて同一人物によるものである。書風は謹厳整飾（引き締まっていて美しく飾られている）で、字体は平たい。

本文献の内容は、『国語』呉語・越語と密接に関わっている。『国語』呉語・越語上・越語下と『越公其事』は、すべて越の勾践が呉を滅ぼすことを主題とした歴史故事である。四者の構造はおおよそ同じであり、すべて勾践が呉と戦い敗れる所から話しがはじまり、呉の支配に耐えて再起を図り、努め励んで国をよく治め、最終的には呉を滅ぼす。

一方で、叙述の詳しさや、表現せんとする主旨はそれぞれ異なるが、全体的に見れば、すべて故事の叙述を主とする「語」類の文献に分類できる。また四者は、すべて異なる側面から勾践が呉を滅ぼす過程を描いており、また関連する歴史事件や教訓を述べて締めくくる。

『越公其事』の言語的特色としては、文辞が華麗で、描写が精緻な点が挙げられる。また、複音詞が大量に用いられてる点も特色であり、同じ清華簡の『繫年』の文章が極めて簡潔なのと対照的である。

『越公其事』の文字は、整っているが誤りも多く、いくつかの字は同時期の楚文字と比べて一致しない。また隷定が困難な初出の楚文字も見られる。

本文献は、呉越の歴史及び、楚文字研究に重要な意義を持つ。

研究書（中文書）

「清華簡《繫年》与古史新探研究叢書」（李守奎主編、中西書局、全て横組繁体字）

清華簡『繫年』に関する研究書シリーズ。計十二冊刊行されている。執筆者は主に清華大学の関係者であり、中には清華簡の整理者も含まれる。詳細は以下の通り。

1 『清華簡《繫年》文字考釈与構形研究』（李守奎・肖攀著、二〇一五年十月、四〇二頁）

『繫年』の文字隷定や、系統、倒写（文字全体や一部

が、上下左右反対になる現象）等について研究した書。

2　『清華簡《繫年》輯証』（馬楠著、二〇一五年十月、四二八頁）
『繫年』本文に関連する記述を引用した上で、自身の解釈を述べた書。

3　『清華簡《繫年》集釈』（李松儒著、二〇一五年十月、三七六頁）
『繫年』本文に関連する記述を引用した上で、自身の解釈を述べた書。

4　『清華簡《繫年》初探』（孫飛燕著、二〇一五年十月、一七三頁）
『繫年』の本文解釈に関する先行研究をまとめた上で、自身の解釈を述べた書。

5　『清華簡《繫年》与《竹書紀年》比較研究』（劉光勝著、二〇一五年十月、三五六頁）
『繫年』本文を校釈した上で、『竹書紀年』と比較研究を行った書。

6　『《繫年》、《春秋》、《竹書紀年》的歴史敘事』（許兆昌著、二〇一五年十月、四〇一頁）
『繫年』・『春秋』・『竹書紀年』の歴史叙述方法及び歴史観をそれぞれ述べた上で、三者を比較して『繫年』の特徴を述べた書。

7　『清華簡《繫年》与《左伝》叙事比較研究』（侯文学・李明麗著、二〇一五年十月、二七三頁）
『繫年』と『左伝』の人物・事象等の叙述形式・方法について比較研究した書。

8　『楚官制与世族探研―以幾批出土文献為中心』（陳穎飛著、二〇一六年九月、三二九頁）
淅川楚墓金文・曽侯乙墓竹簡・包山楚簡を活用して、楚の官制や世族について研究した書。

9　『楚簡書法探論―清華簡《繫年》書法与手稿文化』（邢文著、二〇一五年十月、二七〇頁）
『繫年』を含めた楚簡の書法に関する研究書。

10　『戦国竹書形制及相関問題研究―以清華大学蔵戦国竹簡為中心』（賈連翔著、二〇一五年十月、二九〇頁）

竹簡の形制及び劃痕、符号、編号、書法、工具、整理、保存について考察した書。（詳細については、拙稿「新出土資料関連文献提要（十五）」（『中国研究集刊』第六十三号、大阪大学中国会、二〇一七年）を参照）

11 『古文字与古史考―清華簡整理研究』（李守奎著、二〇一五年十月、三八一頁）

『繫年』を含め、出土文献に関する論考計三十篇を収録した書。

12 『清華簡《繫年》与古史新探』（李守奎主**編**、二〇一六年十二月、五二八頁）

二〇一五年十月に行われた学術研討会「清華簡《繫年》与古史新探」の論文集。計三十八篇の論考が収録されている。

本シリーズは、思想、叙述形式、書法、文字、形制、『左伝』・『竹書紀年』との比較等、多様な視点から清華簡『繫年』を研究する点で特徴的である。

研究書（和書）

『清華簡研究』（湯浅邦弘編著、汲古書院、二〇一七年九月、全四一二頁、縦組和文）

清華簡について様々な角度から考察した研究論文集。中国出土文献研究会による研究成果である。執筆者は、湯浅邦弘・福田哲之・竹田健二・草野友子・中村未来・曹方向の計六名（敬称略）。第一部「清華簡とは何か」、第二部「清華簡の分析」、第三部「清華簡研究の展開」の計三部から構成される。

第一部「清華簡とは何か」では、発見から第六分冊までの状況を概説し、あわせて文字・書法の観点から字迹分類を試みる。そして、各分冊に収録された文献の書誌情報を簡潔に紹介する。

第二部「清華簡の分析」は、九本の論文から成り、清華簡を様々な角度から分析する。具体的に取り上げるのは、『殷高宗問於三寿』・『程寤』・『尹誥』・『耆夜』・『湯在啻門』・『祭公之顧命』・『周公之琴舞』・『命訓』であり、これらによって、清華簡の文献的および思想的特質を明らかにする。

第三部「清華簡研究の展開」は、五本の論文から成り、竹簡に記された古文字や、竹簡に引かれた劃線・墨線などに注目した論考が収録される。

本書は、日本で初の清華簡に関する研究論文集という点で重要な意義を有する。

【お詫びと訂正】

筆者はこれまで、「新出土資料関係文献提要（十一）」から「新出土資料関係文献提要（十五）」までを担当してきた（（十一）のみ共同執筆）が、その中に多くの誤記があった。また、新字体・旧字体が意図せず混在している箇所が多々あった。関係者各位に深くお詫びするとともに、本稿に正誤表を附したい。

正誤表

▼「新出土資料関係文献提要（十一）」
（『中国研究集刊』第五十四号、二〇一二年六月）
・九四頁下段八行目
陳偉等著『楚地出土戦国簡冊［十四種］』
↓陳偉等著『楚地出土戦国簡冊［十四種］』

▼「新出土資料関係文献提要（十二）」
（『中国研究集刊』第五十八号、二〇一四年六月）
・一五五頁下段一〇行目
「合分与余分」↓「合分与乗分」
・一五七頁下段一三行目
『北京大学蔵西漢楚竹書（貳）』
↓『北京大学蔵西漢楚竹書（貳）』
・一五八頁上段一六行目
それぞれ現行本の「道経」「徳経」に対応する。
↓それぞれ現行本の「道経」「徳経」に相当する。
・一五九頁上段五行目
下まで書き終わらずに次の竹簡に書写する形式
↓上・下段に分けて筆写する形式
・同下段九行目
八千一百↓八千百
・一六一頁上段六行目
二〇一一年六月二十七日～二十九日に開催された
↓清華大学出土文献研究与保護中心が編集する不定期の学術論文集。第一集は、二〇一一年六月二十七日～二十九日に開催された
・一六二頁下段一〇行目
「別筆と課題―『上博（六）』所収楚王故事四章の編成」

↓「別筆と篇題―『上博（六）』所収楚王故事四章の編成」

▼「新出土資料関係文献提要（十三）」（『中国研究集刊』第五十九号、二〇一四年十二月）

・一六五頁上段八行目・九行目
歴譜↓暦譜

▼「新出土資料関係文献提要（十四）」（『中国研究集刊』第六十一号、二〇一五年十二月）

・九三頁上段一二行目
かつて文物出版社が出版した『馬王堆漢墓帛書』と比べ、
↓かつて文物出版社が出版した『馬王堆漢墓帛書』壱（一九八〇年）・参（一九八三年）・肆（一九八五年）と比べ、

・九五頁下段二〇行目および二二行目
北京漢簡↓北京大学蔵西漢竹書（北大漢簡）

・九六頁上段一九行目
海老名量介↓海老根量介

・九七頁上段一九行目
『孟子』尽心篇上「集大成也者～～」
↓『孟子』万章下篇「集大成也者～～」

・九八頁下段一〇行目
富谷至↓冨谷至

▼「新出土資料関係文献提要（十五）」（『中国研究集刊』第六十三号、二〇一七年六月）

・二五〇頁上段十一行目
「簡長は三〇・二～」
↓「簡長は三〇・三～」

・二五〇頁下段八行目
「未見北大簡本《蒼頡篇》簡文集録」
↓「未見於北大簡本之《蒼頡篇》簡文集録」

・二五四頁上段一〇行目および一三行目
「「上海博物簡蔵戦国楚竹書」の研究」
↓「「上海博物館蔵戦国楚竹書」の研究」